

活躍する同窓生 震災を乗り越え 青瓷を究める

志賀 暁吉さん (四十八回卒)



昨年十一月、東京・三越日本橋本店において若手実力者による作陶展が開催されました。二〇〇七年、日本陶芸展において史上最年少で大賞に輝いた同窓生・志賀暁吉さんの個展です。志賀さんは、青瓷と呼ばれる、透明感のある美しい青緑色が特徴の磁器をメインに作る陶芸家です。出身地・浪江町の大堀相馬焼とは一線を画し、一点物を公募展や個展に出展されています。浪江町で活動していた志賀さんは、原子力発電所事故の影響で創作活動を中止せざるを得ない時期もありましたが、現在は新地町で活動を再開しています。

創作する際、こだわっているところはどんな点ですか。

こだわっているという点か、気を付けているのは色づくりです。私の青瓷はつやを抑えたマット調ですが、納得できる色合いや質感を出すために、数種類の釉薬を調合し、その割合を変えたものをいくつも焼いて試します。また、使っている赤土や粘土などは、気に入ったものを一トンス単位で購入して土の質を維持しています。



昨年個展に出展した青瓷壺

今後の創作活動で目指しているところはありますか。

前提として「完成度の高い青瓷を創ることがあります。ただ、今まで満足できた作品はありませんし、これからもすべてに納得のいくものを創り出すのは難しいと思っています。その中でも、他の作家とは違った表現方法で、完成度の高い青瓷を創り上げていこうと考えています。

震災後どのような生活を送っていましたか。

地震の翌日には避難をすることになり、しばらくは那須塩原に、その後福島市で生活をしました。創作以前に、生活をどうしたらよいか、何をしたらよいかも分からない状態でした。それでも、長男が小学校に入るまでには定住するところを決めよう、と、あちこち物件を探していましたが、新地によい土地が見つかったので、二〇一四年に家族四人で引っ越ししてきました。築窯もしたので、仕事も再開できました。

故郷・浪江町に対して、どんな思いがありますか。

それは生まれ育った町ですから……家族と話したことはありませんが、いつの日か戻って生活したい気持ちはあります。三〇年後になるか四〇年後になるかもしらねないけれど、それでも浪江を思う気持ちには変わりはありません。

最後に、原高生へメッセージをお願いします。

自分がやらなければいけないもの、やりたいと思うことの中に目標を見つけて、精一杯頑張ってくださいね。そして、私たちOBもマスターズ甲子園を目指して頑張りますので、野球部にはぜひ甲子園出場を果

どんな高校生活を過ごされてきましたか。

野球部に所属していたので、野球漬けの毎日でした。朝、昼、放課後と野球に明け暮れ、合唱コンクールなどの行事は思い出せないほどです。授業中も寝てしまうことが多かったと思います。今はそんなことはできないと思います。三年間担任だった齋藤泉先生は私の状況を理解して、起こさず寝かせておいてくれました。

印象に残っている試合を教えてください。

一年秋に、新チームになって初めての大会で双葉高校に勝った試合です。当時、原高は二年生が一人だけの一年生が主力のチームで、私もレギュラーで出場しました。当時の双葉は大変強く、その翌年は甲子園出場したチームでした。そこに勝つことは誇りです。

現在も野球をされていますか。

はい。壮年の軟式野球チームと、原高のOBチームに参加しています。小六と小二の息子が所属する野球チームにも関わっています。最近監督をさせてもらっています。まだ先のことですが、息子たちが野球を続けていくな、原高野球部で活躍してほしいと思っています。

二人のお子さんは、ぜひ原高高校に入学して甲子園を目指してほしいと思います。

自分ややらなければいけないもの、やりたいと思うことの中に目標を見つけて、精一杯頑張ってくださいね。そして、私たちOBもマスターズ甲子園を目指して頑張りますので、野球部にはぜひ甲子園出場を果

今井選手との交流

昨年七月、東和町ロードレースに、トヨタ自動車九州陸上競技部に所属する今井正人選手(五十五回卒)が、出場しました。その際、今井選手の活躍を願う原高生徒会役員・陸上競技部員は、同レースに出場した同窓会長を通して、マラソングランドチャンピオンシップ(MGC)や東京五輪へ向けての似顔絵入り寄せ書きを贈りました。また、昨年九月に行われたMGCでは、南相馬市からの応援団に加え、同窓会東京支部のみなさんも応援に駆け付け、熱い声援を送っています。

今井選手からのメッセージ全文

原高高校の皆さんへ
この度は、MGCのご声援ありがとうございました。また、



寄せ書きを手にほほえむ今井選手

た、似顔絵と寄せ書きをいただき、本当に力になりました。私の力不足で結果を出す事ができませんでしたが、残り一枠オリンピックに出場するチャンスはあります。しっかりと獲れるように頑張りますので、これからも応援よろしくお願い致します。皆さんも自分の夢や目標に向かい、どうすれば叶えられるかを日々考えながら取り組んでください。そうすれば必ず夢は近づきますし、叶います!!そして、私も必ず叶えます!

今井選手からの手紙

110の記念誌

原町高等学校創立80周年を記念して、二つの記念誌が発行されました。

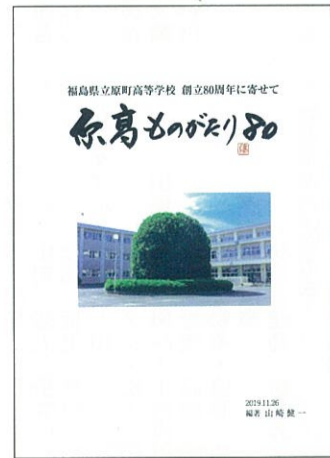
ひとつは「自由の鐘Ⅲ」です。記念事業実行委員会の記念誌委員が中心となって作成したもので、昨年十月に発行されました。この十年の原高の記録を中心にまとめたもので、東日本大震災に関する原高の様子も掲載されており、その内容は二〇〇ページを超えます。表紙は、昨年ご逝去された旧職員・朝倉悠三先生の作品、表紙構成はご子息の現職員・裕一朗先生が手がけた最後の親子合作となりました。

最後に、原高生へメッセージをお願いします。

自分ややらなければいけないもの、やりたいと思うことの中に目標を見つけて、精一杯頑張ってくださいね。そして、私たちOBもマスターズ甲子園を目指して頑張りますので、野球部にはぜひ甲子園出場を果



「自由の鐘Ⅲ」の表紙



「原高ものがたり80」の表紙

いタッチに、校歌に対する熱い思いが感じられます。残部はまだありますので、ご希望の方は原町高校内の80周年記念事業実行委員会事務局までご連絡ください。残部確認の上ご来校いただくか、返信用レターパックを事務局までお送りいただくこととなります。詳しくは、原町高校ホームページでご確認ください。もう一つの記念誌は「原高

ものがたり80」(A4判二二五頁)です。80周年を機に、同窓生で旧職員でもある山崎健一先生(十六回卒)が自費出版されました。山崎先生は、原高在職時から原町高校に関する歴史・出来事や人物等を調べ上げ、生徒や関係者にクラス通信や学年通信、図書館通信などで広く伝えてまいりました。今回は、それ過去の記事に加筆したものに、新たな記事や多くの関係者のことばも掲載されており、「原高の生き字引」山崎先生渾身の

作品となっています。こちらも残部はありますが、残り僅かになっています。協賛金も募って作成されたのですが、自己負担も多いので実費で入手可能です。山崎先生は現在福島市在住のため、「おうち書店」(原町区三島町二一九)で取り扱っていますので、お問い合わせください。